

「ヤスパースの精神医学の哲学—『精神病理学総論』の意義をめぐって—」の要旨

松丸啓子

ヤスパースの精神医学から哲学への歩みの中で『精神病理学総論』（以下、『総論』と略記する）が持つ意義と、『総論』で示されたヤスパースの精神医学の哲学が現代精神医学において持つ意義を明らかにすることが、本論文の課題である。

本論文では、まずヤスパースが一貫して心身二元論を否定する立場に立っていることが確認された上で、ヤスパースが精神病理学に導入した〈了解〉の方法の意義と限界について検討されている。『総論』でヤスパースが確立した〈了解〉の次元では、その限界としての〈実存〉や身体的条件等が示されたものの、〈実存〉そのものについては明らかにされなかった。しかし、精神医学の多様な見解や方法が整理され、それらの有効性と限界の自覚を促す〈方法論的自覚〉が提唱された意義は大きい。さらに本書では、精神療法において患者を〈全体としての人間〉として捉えるために、医師と患者の間に〈実存的コミュニケーション〉が成り立つことの重要性も強調されている。

次に、精神医学の各論についても論じられている。精神分析へのヤスパースの批判に関する考察から、ヤスパースが精神分析理論を了解心理学に属するものと考えていたことが指摘されている。一方、ヤスパースの〈自我意識〉及び〈人格意識〉を手がかりに危機的状況についての考察が行われ、それが自己更新を喚起する絶好の機会を提供するものでもあることが示されている。さらに、〈不安〉と「不安障害」をめぐり考察から、人間が根源的に〈不安〉を抱く存在であることと、そうした〈不安〉を抱くことが必ずしも人間の“弱み”ではないことが論じられている。

最後に、現代精神医学の諸課題がガミーを主な手がかりとして整理された上で、そうした諸課題の克服との関わりにおいて、『総論』で提唱された〈方法論的自覚〉及び〈全体としての人間〉、〈実存的コミュニケーション〉の意義が考察されている。

本論文の結論は、以下の通りである。ヤスパースは、『総論』に自らが導入した〈了解〉では明らかにすることのできなかつた〈実存〉を開明しようと考え、哲学へと転じた。また、ヤスパースの『総論』は、〈方法論的自覚〉を喚起し、〈全体としての人間〉である患者との〈実存的コミュニケーション〉の重要性を喚起する点で、現代精神医学においても大きな意義を持っている。

## 論文審査結果の要旨および担当者

提出者	松丸 啓子
論文審査担当者	(主査) 教授 直江 清隆 教授 座小田 豊 教授 戸島 貴代志 准教授 荻原 理 准教授 原 塑
論文名	ヤスパースの精神医学の哲学 — 『精神病理学総論』の意義をめぐって—
<p>本論文は、ヤスパースの出発点をなす『精神病理学総論』の読解に基づいて、ヤスパース哲学における精神医学の意義を明らかにし、ヤスパースが今日の精神医学に対してもつ意義を提示しようとした意欲的な試みである。論者は、包括的な「全体としての人間」を捉える「了解」という方法論の意味を丹念にたどりながら、ヤスパースが医師と患者の間の「実存的コミュニケーション」を唱えるに至った経緯を明らかにする。その上で、現在の精神医学の哲学の議論に照らして、こうした「方法論的自覚」や「実存的コミュニケーション」の現代的な射程を明らかにしていく。</p> <p>第1章では『精神病理学総論』におけるヤスパースの基本的な人間理解を「心」の概念を中心に検討し、身心二元論を超えた彼の心の哲学の意義を明らかにする。その上で、第2章では、『精神病理学総論』における「了解」の概念を「説明」との違いから解明し、包括的な「全体としての人間」を捉える「了解」という方法論の意味と限界を提示する。とくに&lt;了解&gt;の限界に関しては、&lt;了解できないもの&gt;が何であるかと問うことによって、ヤスパースにおいて「実存」が問題とならざるを得なかった所以を明らかにする。</p> <p>第3章では、フロイトの精神分析に対するヤスパースからの批判内容について考察することによって、無意識を理解するということの意味を明らかにする。また、第4章では、本来的自己の見失われている危機的状況の持つ実存的意義について、ヤスパースが『精神病理学総論』において提示した「自我意識」「人格意識」を手がかりに、ハイデガーやキルケゴールも参照しながら、考察する。第5章では、「不安」と「不安障害」について考察することを通じて、人間が根源的に&lt;不安&gt;を抱く存在であることと、そうした&lt;不安&gt;を抱くことが必ずしも人間の“弱み”ではないことを実存哲学の視点から論述する。そして、そのような人間理解の立場から、今日の「不安障害」を持つ人に対する薬物療法の限界について批判的考察を試みる。</p> <p>全体を総括する第6章においては、『精神病理学総論』で展開されたヤスパースの精神医学の哲学が現代の精神医学においてどのような意義を持つ可能性があるかという問いについて、&lt;方法論的自覚&gt;及び&lt;全体としての人間&gt;、&lt;実存的コミュニケーション&gt;の概念を主な手がかりとして検討する。このことを通じて、ヤスパースの哲学への道筋において、『精神病理学総論』がどのような意義を持つものであるかということを確認するとともに、そこで展開された精神医学の哲学が今日の精神医学の状況においてもなお大きな意義を持っていることを明らかにする。</p> <p>以上の論述は、これまで十分に解明されてこなかったヤスパースにおける精神医学論の意義の解明にとどまらず、ヤスパースの哲学の新たな実践的可能性を提示する点で、斯界の発展に大きく寄与するものであることは疑いを容れない。よって本論文の提出者は、博士(文学)の学位を授与されるに十分な資格を有するものと認められる。</p>	